

## 【論文】

# 日本語教育における「個人」という視点 「人間理解」のための教育を実現するために

喬 穎\*

## 概要

本稿では、中国の大学の日本語科の学生が書いたスピーチ原稿を対象に、彼らがどのような「愛国教育」を受けて、自己の対日認識を形成させたのか、また、日本語を学ぶことが、彼らの日本認識にどのような影響を及ぼしたのか、という問題意識に基づき分析を行った。その結果、日本語を学び、日本人と付き合ううちに、「日本人と中国人」の図式を越え、「個人と個人」の関係が成立し、対日認識も変容を起こしたことが確認された。

## キーワード

日中関係, 愛国教育, 対日認識, 人間理解, 個人的体験

## 1. はじめに

両国間における相互依存関係が緊密になる一方で、中国で日本語教育に携わっている教師は、時には日中関係の不安定による摩擦の影響を受ける。たとえば、2003年陝西省西安にある西北大学で起こった日本人留学生「寸劇」事件、2004年サッカーアジアカップ決勝戦で発生した反日暴動、さらに、「釣魚島」（日本では「尖閣諸島」と称する）の領有権問題をめぐり中国各地で行われた2012年9月の反日デモなど、日中間の対立感情を掻き立てる事件が続いている。

周知のように、中国では国家戦略として「愛国教育」が徹底されている。そのため、小さい頃から「愛国教育」を受けて育った中国人の多くが抱えている「反日」の心情は根深いものがある（蘆, 2002, p. 52）。このような周りからの激しい反日感情が自分の身に及ぶのに耐えながら、日本語を学習している学生は、他の外国語を学ぶ場合とは異なる非常に複雑な気持ちを抱えていると考えられる。

このような事態について、「反日事件の陰ではしばしば見落とされがちであるが、中国にも日本語を学び、日本文化を愛するなど、日中関係の現状を憂慮する『親日派』が少なからず存在することを忘れてはならない。地道で即効性はないが、そのような底辺での寛容、信頼醸成が、両国関係の長期的安定、さらには発展にとって不可欠である」（和喜他, 2006, p. 93）というような指摘はあったものの、なぜ日本語を学ぶことによって「親日」になりうるのかについては議論が行われていないため、日本語学習のいかなる面がどのような作用を起こして、学習者を「親日」に向かわせるのかを考えることは、外国語学習を通して人間同士の相互理解を目指す、われわれ日本語教師にとって現代的な意義があると考えられる。中国で日本語を学ぶ学生にとって、「日本語」はどのように彼らの日本・日本人のイメージ形成の基盤になっているのだろうか。また、こうした「日本・日本人に対するイメージ」（本稿では「対日認識」と呼ぶ）は、いつ、どこで、どのように発生・変容するものなのか、本稿は具体的な資料によってこれを検証するものである。

本稿では、中国で日本語を学ぶ日本語科の学生

\* 早稲田大学大学院日本語教育研究科  
(Eメール: qiaoying@fuji.waseda.jp)

30人の書いた「わたしから見た日本」という題の作文を分析対象に、現在中国の大学で日本語を学んでいる学生が抱えている対日認識の一端が率直に表れている部分を取り上げ、彼らが今までどのような情報（教育）を受け、現在の対日認識を形成させたのか、また、日本語を学び、日本語で表現することが、彼らの従来持っていた日本認識にどのような影響を及ぼしたのか、という問題意識に基づき、考察を行う。そのうえで、日中友好の発展的な展開が求められ、教育と人材育成が連携する新たな時代における「日本語を学ぶこと」の意味について考えてみたい。

## 2. 先行研究

中国社会科学院日本研究所の2004年の調査<sup>1</sup>によると、中国の一般国民が「日本に親しみを感じない」理由について、4つの選択肢の中で、「中国を侵略した」が26%、「日本が中国を侵略したことを、いまだに反省しない」が62%で、合わせて9割近くを占めた。一方、ほぼ同じ時期に『中文導報』も在日華人を対象として日中関係に関する世論調査を行った。結果として、日本に「信頼感を持つ」と「どちらかと言えば信頼感をもつ」が合わせて48.3%であった。この世論調査の結果から、日本の文化や社会および日本人に長く接触することにより、理解する度合が増していくことが窺い知れる。

このような調査の結果を言語教育と結びつけて考えるとき、言語教育において、言語と文化は切り離すことのできないものであると言えよう。「外国語を学ぶ」ことは、当然ながら異文化との接触を前提とする。細川（1999）は、日本語教育における文化を、コミュニケーションにおける個人の場面認識の在り方であると定義している。これは、文化を客観的実体ではなく、個人の認識に求める捉え方である。すると、日本語の学習は、日本に対する個人的な認識の発生その変容を前提とすることになる。

一方で、海外において、現場の日本語教師の間には、文化を固定的なものとして捉え、ステレオ

タイプを助長する授業を行う傾向があるという問題は否めない。中国のある日本語科の学生の学習参考書として、教師による日本文化理解の推薦図書のパージは、『菊と刀』『武士道』『日本論』『日本人』という4つの「日本の民族性を洞察する『日本四書』を代表作」として取り上げている。中国の学生が日本に興味を抱き、読書を通じて日本文化について知識を得ようとする教育の効用をすべては否定はできないが、「日本文化の根幹であるというような単純化された日本文化への理解がなされるとすれば、それは読者の日本理解を限定していると言わざるを得ない」（及川、2007）という心配の声もある。

この批判的な視点をさらに理論化した細川（2002b）は、「個の文化」という捉え方を提唱した。「個の文化」とは、人間一人ひとりの中にある暗黙知の総体であり、外側から観察することはできないものである。その発見は、個人が自らを取り囲むさまざまな事象としての対象を認識し、それを他者に向けて記述することが、その人の「個の文化」の発現であり、これを支える能力の総体が「文化リテラシー」である（細川、2002a）。筆者は、細川の理論に基づき、中国人学生の「対日認識」形成の過程が、彼らが「日本の文化」を捉え直し続け、自己を変容させる過程であるという認識を持つとともに、異文化理解の発生過程は、二つの文化の間で発生するというより、一つの文化の内部で作られるものであり、自己批判、自己否定、自己更新のプロセスを通して、「理解」を求める主体（人間）のアイデンティティの再構築の中に存在していると考えられる。

## 3. 調査概要

### 3. 1. 調査対象

本稿では、中国で日本語を学ぶ日本語科の学生が書いた「わたしから見た日本」という題の作文を分析対象とする。分析データとして集めた作文は、「中華全国日本語弁論大会」<sup>2</sup>第1回目の華東地

1 2002, 2004, 2006, 2008年、中国社会科学院日本研究所の主催で中国全土において、計4回の大規模な「日中世論調査」が行われた。

2 「中華全国日本語弁論大会」は中国で日本語を学ぶ大学生を対象に2006年から毎年開催されているもので、日本語学習の意欲を高め、日本への理解を深めてもらうことを主眼とした日中交流事業の一つである。

区予選（2006年6月10日、上海の華東師範大学で開催。以下、「弁論大会」と略す）に参加した30名の出場選手が書いた5分間の日本語スピーチ原稿（1500～2500字）である。参加者はすべて、当時中国の華東地域の大学で日本語を専攻していた学部生である。その内訳は、表1のとおりである。

表1. スピーチ原稿筆者リスト

大学名	筆者	大学名	筆者
上海交通大学	琳	復旦大学	雲
華東師範大学	焯	上海大学	佳
上海工商外国語大学	文	東華大学	芯
上海对外貿易学院	日	同濟大学	吟
上海第二工業大学	婷	南京大学	静
上海外国語大学	行	江蘇大学	群
上海師範大学	音	楊州大学	林
上海海事大学	英	東南大学	史
南京師範大学	華	浙江大学	広
南京航空航天大学	超	江西財経大学	蘭
南京信息工程大学	齡	江西師範大学	樹
南京工業大学	霞	寧波大学	濤
浙江工商大学	立	南昌大学	麗
浙江林学院	恵	蘇州大学	雅
浙江師範大学	露		
浙江万里学院	那		

「筆者」は、すべて弁論大会の出場選手。名前は、仮名。

次に、本稿で「わたしから見た日本」という題の「作文」を調査対象にした理由を述べる。

まず、浜本（1975）が指摘するように、「表現することは認識することであり、書き表すことを通して認識力が育っていく」のであり、漠然とした印象や感動は、書くことによって確かなものとして認識され、さらに、この認識がいつそう深く認識を発展させていくことができると考えられる。

また、弁論大会のテーマが「わたし」と結びつけられているため、弁論大会向けであるということも考慮に入れて、なお、書く人自身の思想が表れていると考えられる。つまり、「わたしから見た日本」というテーマ自体、中国で日本語を学習する学生たちの「対日認識」一部を反映していると考えられる。

さらに、同弁論大会が開催される前には、2004年の「サッカーアジアカップ事件」に引き続き、中国全土で「反日デモ」が起きている。2005年10月に開催される予定だった同弁論大会は、「反日

デモ」の影響で、2006年6月に延期された。したがって、これらの「作文」には、日中関係が「政冷経熱」であった時期の中国人日本語学習者の対日認識がある程度反映されていると考えられる。

なお、筆者は同弁論大会組織委員会の秘書を務め、スピーチ原稿を収集し、冊子の形で一般公開することについて各参加選手の同意を得たうえで、2007年に『作文集』の形で日本語教育の関係者に公開した。

本研究では、「弁論大会」のために作成したスピーチ原稿を分析の材料として取り扱っているため、公共の場での聴衆へのアピールが含まれている可能性は否定できない。また、そこに学生の思想・心情がどの程度正直に吐露されているかを判断することも難しい。しかし、これらの原稿は、日本語を学ぶ彼らの日々の学習成果のまとめとして大会向けに作成された一般公開の資料でもあるため、中国社会においてある程度の影響力を持つものだと考えられる。もちろん、弁論大会で優勝すれば、日本観光への招待などの実利的なメリットを得られるために日本語科の日本人教員の作文執筆指導を受けた可能性も排除できない。しかし、そうだとした場合、日本人教師と積極的に交流し、指導をしてもらいたいという能動性が日本語を学ぶ意欲と深くつながっており、それがひいては学生たちが教師と「個人と個人」として向き合うきっかけを作っているというのも事実である。本稿の筆者は、公式行事であるスピーチの原稿作成過程においても、このような「個人と個人」の相互理解の軌跡が見えると考えて、これらスピーチ原稿を分析の資料とした。

### 3. 2. データの分析方法

本研究は、「修正版 M-GTA」（木下、2003）という研究方法を用いる。M-GTAでは、「分析テーマ」と「分析焦点者」の2点から分析を進める。本研究の「分析テーマ」は、「中国人日本語学習者の対日認識の形成、変容プロセス及びその原因」であり、「分析焦点者」は「日本語専攻の中国人大学生」である。

分析は、ワークシートを使用する。分析の手順は、木下（2003）によって、以下の5点にまとめられている。①分析テーマと分析焦点者に照らしてデータの関連箇所を探し、それを一つの具体例として他の関連する例を探す。この作業を行って

いるうちに類似の例がどんどん生まれるが、これを一つにまとめて概念を作成する。②概念を作る際に、表2のようなワークシートを作成し、概念の名称と定義、その概念に属する具体例<sup>3</sup>を記入する。③データを分析する中で、新たな概念を生成し、一つの概念につき一つのワークシートで分析を行う。④複数の概念の関係からカテゴリーを生成し、その相互関係から分析結果をまとめ、文章化する。⑤最後に理論的なストーリーラインを構成する。

表2. ワークシートの一例（具体例は一部のみ）

概念	「個人」としての能動的な役割認識
定義	「友好」は国同士のレベルの関係を意味するだけではなく、個人と個人との付き合いから成立し、かつ、「相手」を知ろうという努力が欠かせないものである。
具体例	「国と国の関係は、そもそも人と人の関係の延長線にあります。」（林, 11 頁） 「中日両国の間にある諸問題に関して、『一人』の人間としての共感を持ちながら考えていくことこそ、今の時期において、最も大切なことだと思います。」（日, 15 頁） 「交流は広い意味では国と国との接触ですが、その中身は多くの個人と個人との交流から成り立っています。」（英, 22 頁） 「わたしの『中日友好』は相手を知ることから始まった。好き嫌いとは関係なしに、とにかく相手を知ろうと努力することからすべてが始まった。」（静, 29 頁） 「個人と個人の友好を実現できてこそ、国家間の友好がはじめてあり得るのです」（露, 47 頁）
理論的メモ	1. なぜ「個人」という意識が芽生えてきたのか。その過程にはどのようなものがあるか。 2. こうした「個人」という意識が日本語を学ぶことに由来するなら、日本語を学ぶことは学習者にとってどのような意味を持つか。

以上のように、概念の数だけワークシートを作成する。同時に、具体例を追加記入する。

3 具体例として引用した学生の作文には文法的な誤りがあるが、引用に当たっては学生の原稿通りに示している。

### 3. 3. 分析の結果

3. 2の分析手順に従って、中国人日本語学習者の対日認識の形成及びその変容について、【対日認識の先入観】、【均質かつ画一化された「日本文化観」】、【「個人／個人」の関係性から生まれる新たな対日認識】という学習者自身の学びの経験と関連する3つのカテゴリーが生成された。なお、本稿では、カテゴリーを【 】, その下位概念を〈 〉で示すことにする。

#### 3. 3. 1. 【対日認識の先入観】

最初に、中国人学生の対日認識がどのように形成され、どのような性格を持っているかを考えた。このカテゴリーは、〈対日認識の二重性〉と〈愛国主義の指向性〉という2つの概念から生成した。

##### 〈対日認識の二重性〉

国際交流基金の2010年度の調査によれば、中国における日本語学習者数は計83万人で世界第2位である。日本語の専攻科を設ける大学は466校も存在し、日本語学習者数全体の7割近くが高等教育の在学者であることが大きな特徴である。これらの数字を見れば、中国における日本語学習熱はまだまだ高いほうだと言える。彼らが日本語学部に入る時点で抱いていた〈対日認識〉に関しては、以下のような記述が見られる。

中国で生まれ育った私には、多くの中国人と同じように多少反日感情を抱いたことがあります。日本という国がいやなので、日本語を勉強する気にもなれなくて、日本語を使う人を見るのも不愉快に思うことを経験しました。（雲, 14 頁）

わたしは大学に入る前に日本や日本人にはいい印象を持っていませんでした。嫌いだというほどではなくて、絶対に好きだとは言えませんでした。（恵, 46 頁）

子供の頃はテレビで日本のアニメを見るのが好きでした。中学校や高校の歴史の時間に、日本軍による侵略戦争について勉強した時には、日本という国に好感が持てませんでした。子供たちを夢中にさせる、面白くて楽しいアニメを作る国の日本と、中国に残虐行為をした日本は、いったいどういうつながりがあるのでしょうか。（樹, 55 頁）

上の記述から明らかなように、中国人日本語学習者は必ずしも全員が日本及び日本文化に興味や愛着を持って日本語専攻を選んだわけではない。むしろ学習開始時には、反日的な感情、日本に対するマイナスのイメージを抱いていた者のほうが多い。彼らの記述に特徴的にみられたのは、小さい頃の歴史の授業で受けた「近代日本が中国を侵略した」という教育内容である。したがって、現行の点数割当方式による大学入試制度では、やむを得ず日本語を学習している学生もたくさんいるのが実情である。

しかし、一方で、現在日本語を専攻している在学生のほとんどは、1990年代以降に生まれた世代であり、日本のアニメや漫画をみながら育った彼らにとって、対日認識はマイナスのイメージばかりというわけでもない。日本を「肯定的に捉える」部分は、以下のような記述にみられる。

日本という国はどんな国でしょうか。わたしたち中国の若者は、おそらく幼いころみた日本の「アニメ」「漫画」「テレビドラマ」などから影響を受けて、日本に興味を持つようになりました。(文, 20頁)

中国では日本のドラマを見る人が増えていきます。日本のドラマはその内容の豊富さ、ストーリーの簡潔さや人間性で人気を呼んでいます。(苺, 19頁)

小さい頃、わたしの日本についての印象と言えば、「南京大虐殺」と『ドラえもん』程度のものでした。(音, 28頁)

中国の日本語学習者の日本に対する印象には、小さい頃から深く印象に残る日本人の「侵略者」のイメージと、日本のアニメやドラマによる日本に対する「親しみある」イメージという二重の性格が存在していることを、以上の具体例が明白に示している。日本語を勉強するにあたって、この相反する二つの認識が、時には複雑な心境に転じることもある。次のような語りから、日本語を学ぶことに伴う精神的な苦痛が窺える。

中国の文化に惹かれて、中国のことが大好きと誇らしげに宣言している外国人がたくさんいるのに、中国人として日本のことが好きだとは、いつの間にか言いづらいこと

になりました。(林, 11頁)

実際には、日本人が嫌いなら、もちろん日本語が上手にならないです。一方、日本人が好きだというと、周りの人に非難されたり、注意されたりします。(佳, 17頁)

確かに歴史の傷跡はまだ痛みます。わたしたちは忘れっぽい人ではありません。しかし、私からみると、日本の文化は、富士山のように神秘で不思議な魅力があります。(齡, 36頁)

以上の「語り」から明らかなように、中国人日本語学習者の多くには、日本語を勉強し始める前に、「反日」と「親日」という二つの対日意識が子供の頃からすでに形成されている。日本の最も良き理解者になるはずであろう日本語学科の学生も、全員最初から自らの意志で日本語を学ぼうとしていたわけではない。こうした日本に対する複雑な感情を抱いている彼らにとって、日本語を学ぶことは、まさに「日本語を学ぶこと」の意味を見つけることでもあると言えよう。

#### 〈愛国主義への志向性〉

こうした二重性を持つ対日認識は、一体なぜそれほど根強いものであるのか。このことについて、国家戦略として「愛国主義」が行なわれる教育体制の中で、学生たちはどのような情報を受けているのか、またその影響はどのようなものかを分析してみる。学生の作文には、以下のような記述が見られた。

わたしの祖父は今年73歳で、かつて中日戦争を体験しました。祖父は時々中日戦争についてわたしに話してくれますから、わたしは戦争のことを大体知っています。もう60年余りが経ってしまって、その戦争も遠い過去のこととなってしまいました。でも、私たちは歴史を忘れるべきではなく、未来への教訓を映す鏡にして、中日友好関係を発展させていかなければなりません。(恵, 46頁)

高校2年生の春、愛国教育の一環として、生徒全員で南京大虐殺記念館を参観しました。血生臭い写真や殺された人々の骨が並ぶ展示室に入ると、わたしは身の毛がよだつほどの恐怖を感じました。(静, 29頁)

幼かった頃、戦争のことに對して、具体的な概念がありませんでした。戦争時代に大勢の中国人が日本の侵略軍にむごたしく殺害されたことだけ知っていました。(霞, 39 頁)

わたしたちは私たちの時代だけを生きているのではなく、歴史を背負って生きているのだから。(霞, 40 頁)

一読して驚く人も多いと思うが、こうした内容の作文は、日本語を学習する中国人学生の間では一般的なものであり、日本語教師（中国では日本語を母語とする日本人教師が作文の授業を担当することが多い）に手渡されることも決して珍しくない。これらの記述から、学生たちがなぜ「反日的」な先入観を持っているのかについて、その原因の一端が窺える。これまで中国で起きた一連の反日事件で過激な反日行動をする中国民衆を目のあたりにした日本人は、大きな違和感を覚え、その原因を中国の「愛国教育」が実は「反日教育」であるためであるという議論を展開した。しかし、日本側の批判に対して、中国外交部報道官は、「中国の愛国主義教育はいわゆる反日教育ではない。中国側は一貫して『歴史を鑑として未来へ向かう』という精神に基づき国民を教育し、これまで国民、特に若い世代に反日・排日感情を教え込んだことはない。かえって、我々の歴史教育は中日両国人民の世代を超えた友好に立脚し、中日関係の発展を推進していくことを強調してきた」という説明を行った。

中国で行われた教育は「反日志向」なのか、「友好志向」なのか、中日両国それぞれの立場で意見が出されているため、この点について議論をしてもあまり意味がない。それよりも重要なのは、このような教育を受ける学生たちの受け止め方のほうであろう。上記の作文の記述例からもわかるように、彼らの戦争や歴史問題に対する認識と態度は決して同一とは言えない。この点に関しては、陳 (2003) が、「現在の大学生は過去 100 年間の中日関係における二つの基本事実、つまり日本側が『中国を侵略した事実』と『歴史認識の態度が曖昧である』ということに関して、非常に詳しいようだが、しかし、この二つの基本事象の背後にある複雑な歴史的な背景については、あまり教育されていない。複雑な問題に対する、認識の表面化と

単純化は、彼らの偏った日本観の形成に影響を及ぼした」と指摘したように、単一化された教育素材、内容及び方法により行われてきた教育だからこそ、その効果として「日本憎悪」をここまで駆り立てたと考えられる。

### 3. 3. 2. 【均質かつ画一化された「日本文化観」】

次に、中国人の日本語学習者の作文には、どのような日本の文化がどのように紹介されているのかを考察してみる。彼らが作文に取り上げた話題は、彼らがどのような文化を通じて日本を認識しているのかを表していると思われる。このカテゴリーは、〈日本に関連する知識の情報源としての漫画、ドラマ、教科書〉と〈日本語の学習と日本社会・文化とを連結する教育方針の不徹底〉という二つの概念から生成された。

〈日本に関する知識の情報源としての漫画、ドラマ、教科書〉

まず、中国人学生の作文に多く取り上げられた名詞のトップ 5 を、表 3 の通りにまとめた。

表 3. 作文に出現した日本に関する名詞トップ 5

名詞	作文で言及された回数
桜	12
働き蜂 (日本人の勤勉さ)	9
(日本人の) 礼儀正しさ	6
建前と本音	4
集団精神	4

さらに、高い頻度で出現した日本に関連する上記のような名詞に関して、具体的には、以下のよう記述が見られる。

日本を代表するものは何だと思いますか。武士、着物、漫画、電子製品などと答える人はきっといるだろうが、私には日本のイメージが桜と重なっているように見える。(吟, 25 頁)

授業で桜特集のビデオを見たことがある。桜の下に、大勢の人が楽しそうにお酒を飲んだり、お弁当を食べたりしていた。ビデオを見ると、日本人にとって桜がどんな重要な存在であるか初めて分かってきた。(同上) 大化の改新、明治維新、戦後改革、いずれも日本を苦境から、より進歩的な社会へ変えました。(齡, 37 頁)

日本人と言ったら、微笑みもなく、生まじめな顔をしていて、堅苦しい言葉を操る日本人の役員とサラリーマンの姿を浮かべる人が多いでしょう。(立, 44 頁)

日本人の勤勉さは世界的に定評がある。(中略)日本の「過労死」は世界に通用する国際語になってしまった。死亡に至らないまでも、手足などに後遺障害が残った「企業戦士」も少なくない。さらに、仕事上のストレスなど精神的な原因から、自らの命を絶つ過労自殺もみられた。(華, 31 頁)

「建前」という原則はいかにも日本の社会文化の際立った特徴の一つだと思います。(立, 44 頁)

中国で日本語を学ぶ学生たちが、日本に関する情報を得る手段としては、概ね、(1)日本のドラマ、映画、漫画、アニメの鑑賞、(2)授業(教科書)での学習、という2つの方法が一般的である。これらの手段は、学生たちに日本社会を感じさせ、ある程度日本語の学びに役に立ったが、陳(2006)の調査では、中国人学生の対日認識に関して、「中国の学生たちは、日本に対する認識を聞かれた場合、多くの方は自分が見たドラマや漫画に言及する傾向がある。このような現象は、逆に彼らの現実の日本、日本人に対する知識があまりにも少なすぎることの反映でもある。漫画やドラマの鑑賞は彼らに文学的、虚構したバーチャルな世界しか提供することができないからだ。」という指摘がなされている。

以上の記述からもわかるように、中国人学生の日本文化観には、均質かつ画一化された認識が見られる。この点に関して、しばしば、「中国の学生は教科書の暗記や試験対策ばかりする傾向がある。優秀な学生ほど、教条的に教科書通りの内容を繰り返す傾向が見られる」と指摘されるが、実際、学生たちが日ごろ接触する「日本文化」の情報源の単一性が、こうした日本文化観を形成させる根本的な原因の一つであると考えられる。〈日本語の学習と日本社会・文化とを連結する教育方針の不徹底〉

作文に取り扱われる話題には、概ね以下のような内容が見られる。

1. 社会問題：ゴミ問題、フリーター問題、身体障害者問題

2. 教育：短期留学の思い出、日本人の先生との付き合い、大学訪問などの日中民間交流のイベント

3. 戦争・世界平和：抗日戦争勝利の特別番組の感想、日中友好の未来

4. ビジネス・経済：職人精神、日本人の「武士精神」、日本人の「建前」

5. 家族の話題：ホームステイの体験

中国は、近年の改革開放の深化に伴い、著しい経済発展をしてきた。この発展の中で、環境問題、就職問題を重視する傾向は、国策と一致する。実際、学生のスピーチが経済や環境の話題を取り上げる割合が大きい。また、近年、中国における大学専攻科の日本語教育は、単なる言葉の教育から、次第に文化・社会などの知識の獲得をも含めた総合教育へと変化しており、異文化コミュニケーション能力(王, 2007)、多文化理解能力(曹, 2011)など、日本語を学ぶことを日本の社会・文化の学習と結びつけるように展開されてきている。以上の学生の作文の記述から明らかなように、日本人の勤勉さ、日本の近代化の過程や先進技術の導入の方法を肯定的に捉える一方で、日本文化に関するステレオタイプな記述が多くみられる。

### 3. 3. 3. 【「日本人／中国人」を越えた「個人／個人」の関係性から生まれた対日認識】

中国人日本語学生たちの対日認識は、日本語を学ぶ年数が増えるに従い、生身の日本人との交流や実際の留学体験を通して、日本(日本人)に対して抱いていた観念的な不信感が薄らいでいく傾向もみられる。実際に、学生たちの作文の中には、日本人と接したことで獲得した新たな認識を中国人に向けて発信し、将来の中日関係を改善しようとする意識が見られた。このカテゴリーは〈個人としての能動的な役割認識〉と〈個人的体験を通じた自主活動〉という二つの概念から生成された。

#### 〈個人としての能動的な役割認識〉

難しい国際情勢の問題はさておき、国の最小エレメントである人間に絞って考えてみましょう。国と国の関係は、そもそも人と人の関係の延長線にあります。(林, 11 頁)

個人的レベルの付き合いの一步を踏み出さない限り、いくらドラマを見ても、いくら言葉を覚えても、いくら日本文化オタクになっても、それは生身の日本人をわかるこ

とは言えません。(雲, 13 頁)

中日両国の間にある諸問題に関して、「一人」の人間としての共感を持ちながら考えていくこそ、今の時期において、最も大切なことだと思います。(日, 15 頁)

交流は広い意味では国と国との接触ですが、その中身は多くの個人と個人との交流から成り立っています。(英, 22 頁)

わたしの「中日友好」は相手を知ることから始まった。好き嫌いとは関係なしに、とにかく相手を知ろうと努力することからすべてが始まった。(静, 29 頁)

中日の友好関係は、両国政府だけでなく、両国の国民一人ひとりにかかっているものであることがわかります。個人と個人の友好を実現できてこそ、国家間の友好がはじめてあり得るのです。(露, 47 頁)

このように、学生たちが日本（日本人）に抱いていた観念には、これまでの単なる「日本人／中国人」といった関係の図式を越えて、「個人／個人」としての関係が新たに成立している。その結果、最終的には信頼関係の確立のために役立ちたいと述べる学生が多かった。

#### 〈個人的体験を通じた自主活動〉

では、その対日意識の変容に関わる要因は何だろうか。対日認識の変容に関する記述には、以下のような記述がみられる。

今、わたしが日本に対する感じは大きく変わっています。その決定的な転換ができたのは、きっと日本語を勉強してきた結果だと信じています。日本語を勉強して、それをきっかけに、「実物の日本人」と出会い、もともと頭の中にパターン化されたイメージは崩れ始めたのです。(雲, 14 頁)

日本人は「まじめで、責任感があり、仕事はきっちりやる」と言われていますが、一校先生を見て心から納得しました。(文, 21 頁)

大学の日本語学部に入學する前は、正直言って、日本という国に偏見ばかり持っていました。それが日本語を勉強しているうちに次第に変わりつつありました。(広, 51 頁)

私たちは日本語を勉強していて、日本の経済や文化など各分野の知識や情報を学んで

いるのに、政治についてはともすれば持ち出しもせず、まるで人事のように避けて済む。(中略)避けるより一層大切なのは政治をどうすれば正確で客観的にみるべきかを教えてもらうことだ。自国のマスメディアの報道だけでなく、普通の日本人がどうなのか。中国と中国人のことをどう思っているかをも知りたい。(立, 45 頁)

ここでは、日本語を学ぶ前に依然迷いの中にあつた日本認識と、自己の日本語の学びの過程で発見した日本認識との違いを見つめることが、日本語を学ぶことによって自身の価値観を変容させた体験として意味付けられている。また、日本語を学ぶという自らの体験に根ざした「アイデンティティー」の再構築に関わる実感こそが、新たな日本認識への一歩であり、それが日本語を学ぶことの新たな原動力として機能することも示されている。

#### 3. 4. 中国人日本語学習者の対日認識形成、変容のストーリーライン

以上では、【対日認識の先入観】、【均質かつ画一化された「日本文化観」】、【「個人／個人」の関係性から生まれる新たな対日認識】という学習者自身の学びの経験と関連する三つのカテゴリーを通して、学習者自身の学習経験が対日認識に変容を及ぼす理由分析した。その形成と変容のプロセスを、上記のカテゴリーをもとに、以下のような理論的ストーリーラインに構成することができる。

まず、【対日認識の先入観】について、このカテゴリーには、〈対日認識の二重性〉と〈愛国教育の指向性〉という二つの概念がある。中国の学生たちは、小さい頃から国家戦略として「愛国教育」を受けている。そのため、中国人の多くが近現代における戦争の被害者としての歴史を「国恥」として痛切に感じている事実がある。したがって、日本語を学ぶ学生には、「反日」と「親日」という二つの意識が形成されている。このような複雑な感情を抱えながら日本語を学ぶことは、時には精神的な苦痛を伴う行為でもある。

次に、【均質かつ画一化された「日本文化観」】に関するカテゴリーがある。このカテゴリーには、〈漫画、ドラマ、教科書から日本に関する情報の獲得〉と〈日本語の学びと日本社会・文化との連結の教育方針の不徹底〉という概念がある。彼ら



は、日本語を学ぶ年数が増えるとともに、日本に対する知識が深まることで、独自の考え方を持つようになった。彼らの語りには、「伝統的な封建国家から近代的な国家に変わった過程」、「日本人が国のため『働き蜂』と呼ばれてまで勤勉に働く」など、「憎悪」から「賛美」に変わる気持ちもみられるようになった。しかし、一度も日本を訪れたことのない学生たちの日本に対する認識の情報源はかなり限られている。そのほとんどは漫画、アニメ、ドラマ及び教科書、教師の教えなどを通して獲得するものである。したがって、このように形成された対日認識に、ステレオタイプの固定観念が多く見られるのも実情である。

さらに、【「個人／個人」の関係性から生まれる新たな対日認識】というカテゴリーがある。このカテゴリーには、〈個人的体験を通じた自主活動〉と〈「個人」の能動的な役割の意識化〉という概念が含まれる。日本語を学ぶ学生は、学年が上がるに従い、現場の日本人教師との交流が深まっていく。日本人教師との付き合いが、日本を知る窓口を開き、日本人に対して抱いていた不信感が薄らいでいく。また、現在中国の各大学では、短期の留学プログラムも積極的に展開されているため、学生たちは在学中に日本を訪問し、身をもって日本を体験する機会も多くなった。「中国へ帰ったら、自分の目でみたり、耳で聴いたりしたほんとうの日本を周りの人に伝えたい」、「2週間の日本滞在は、私にとって大きな転機となる旅行でした。自分の文化と違うからといって嫌ったり避けたりするのではなく、その現象に好奇心を持って、『どうしてなんだろう』と考えていくと、意外な発見があることがわかりました」という学生の語りには、実際に日本（日本人）と接したことで得た対日認識が窺える。

前節の分析でわかるように、現在の中国人学生が少なからず抱いている日本像は、中国における「愛国主義」を支えた教育やマスメディアの先導による作り上げられた日本像に由来するところも大きいのは否めない。水谷（2004）は、そんな彼らを、「中国社会において入手できる日本情報、つまり『中国共産党の視点』というフィルターをかけた日本像を、絶対と信じて、モノを斜めから見たり突っ込みを入れたりすることのない、ある意味純粋で『優等生』な青年たち」と評している。この点について、李（2005）も、中国の教育問題と

して、「陳腐な教科書」に基づく受験教育の弊害をあげ、「自己の考えを通して自分なりの結論を導きだすことを奨励されないどころか、許されなかったのである」と批判している。

確かに、中国の国家主導の体制に置かれた教育は、束縛を受けることが多々あるため、「愛国」や「反日」は、学生に「記号化」を生じさせやすい。これを防ぐために、価値観の多様化を促す思想や学問が必要とされる。そもそも、言語、民族、文化、国家は、それぞれに単純には等式では結べない関係にあり、「国」の枠内に文化をとどめるだけでは、誤解や偏見といった問題を招来しかねない。したがって、「愛国主義」教育は、「一国主義」になってはならない。そうやってしまえば、「偏狭」に陥りやすく、過激な反日感情に容易に転化してしまう危険性がある。そこで、日本語教育にも「異文化」を結びつけ、「多元的な価値観」を養う教育を行わなければならない。

#### 4. 「人間理解」のための日本語教育の実現を目指して

最近、中国で反日事件が頻繁に繰り返される中で、現場の日本語教師は、英語やフランス語など、他の言語を教える教師とは同列に扱えない困難に直面することが実際に多かった。〈政治とは国と国との事柄だから、私たち国民としては政治を問わず付き合っている〉と言い、なるべく授業でこの問題を避けようとするなど、中国人日本語学習者への「配慮」はあったものの、「反日意識」は日本語を教える（学ぶ）以上、実際には避けられない課題でもある。

では、改めて中国における日本語教育の意味を考えよう。中国で1990年に出版され、1999年に改訂された『大学日本語専攻基礎段階教育大綱』の冒頭部分は以下のように書かれている。「言語とは人類のコミュニケーションの道具であり、コミュニケーションという目的に達するためには言語をよく習得し、使用しなければならない。このため、言語の基礎的知識と技能の訓練が基礎段階の教育における中心となる」（拙訳）。このように、国家主導の教育方針が行なわれる中国では、日本語＝「道具」という言語観が日本語教育の理念の中核となっていることがわかる。しかし、言語が単なる「道具」なのであれば、その「道具」を駆使

する「人間」はどこに位置づけられるのかがさらに問題となるであろう。

人間同士のコミュニケーションがスムーズに行われるためには、相互理解が必要だとよく言われる。しかし、ある程度日本語ができる学生の語る「対日認識」というものは、果たして、異文化における相互理解の基盤になるであろうか。恐らく、国が違うという物理的な条件だけでは、前提にはならないであろう。なぜなら、相互理解というものは、誰にとっても必要なものでもなければ、国籍の違いで、簡単にできるものでもないからである。相互理解が発生する条件として、一つの文化の内部で作られ、そして、「理解」を求める主体としての人間の能動性が最も重要である。

本稿の中国人日本語学習者の作文分析から明らかになったように、学生たちは、学年が上がるに従って、生身の日本人教師との交流が深まってくため、日本人に対して抱いていた観念的な不信感が薄らいでいき、単なる「日本人と中国人」といった関係の図式を越えて、「先生と学生」としての、ひいては「個人と個人」としての関係を新たに成立させていく。そこには、中国人学生の視点で「日本語を学ぶ」ことの意味が書き出されていると思う。

中国人学生の「対日認識」形成の過程は、彼らが「日本の文化」を捉え直し続ける過程であるとも言えよう。このように、異文化に対する理解の発生過程は、自己批判、自己否定、自己更新のプロセスを通して、「理解」を求める主体としての人間のアイデンティティーの再構築の中に存在しているものと考えられる。学生が日本語を学ぶことを通して得たのは、道具としての日本語の「スキル」だけではなく、一人の人間としての成長であろう。さらに、このような成長は、再び日本語の学習と結びつき、日本語の習得を促進するだけでなく、異文化から得たインパクトを「理解しよう」という過程の中で自己変容のエネルギーに転じる。このように、中国人学生の「対日認識」の形成の過程は、まさに彼らが「日本文化」を捉え直し続け、自身を変容していく過程であるとも言えよう。

本稿の筆者のように中国での日本語教育に携わる者は、学生たちが日本との交流において個人的体験を豊かにしていくことを保証する教育活動を広く展開し、本稿で筆者が示したような日本語教育における「人間理解」の意味に関する新たな視

点を学生が得られるよう努力しなければならないと考える。

## 文献

- 王秀文(2007). 日本語教育改革と人材育成モデルの構築『貴州民族学院学報』101, 57-61.
- 及川淳子(2007). 北京における日本関連図書事情——「日本論」をめぐる一考察. 法政大学国際日本学研究所(編)『相互理解としての日本研究—日中比較による新展開』(pp. 309-338) 法政大学国際日本学研究所.
- 木下康仁(2003). 『グラウンデッド・セオリーアプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂.
- 曹大峰(2011). 内容と能力を重視した日本語教育へ向けて——中国語母語話者向けの新しい日本語教材の開発研究事例『日本語／日本語教育研究 2』(pp. 253-265) ココ出版.
- 陳生洛(2003). 中国人大学生の日本に対する見方『青年研究』2003年第11期, 22-29.
- 陳生洛(2006). 中国人大学生の米国観と日本観との比較『中国青年政治学院学報』2006年第6期, 27-30.
- 浜本純逸(1975). 実力を高めるレポートの書き方. 平井昌夫, 大熊五朗(編)『情報化時代のことばの生活』(pp. 109-142) 至文堂.
- 細川英雄(1999). 『日本語教育と日本事情——異文化を越える』明石書店.
- 細川英雄(2002a). 『日本語教育は何をめざすか——言語文化活動の理論と実践』明石書店.
- 細川英雄(2003). 「個の文化」再論——日本語教育における言語教育の意味と課題『21世紀の「日本事情」——日本語教育から文化リテラシーへ』5, 36-51.
- 水谷尚子(2005). 「反日」——解剖 歪んだ中国の「愛国」『文芸春秋』9月号, 112-113.
- 李大同(2005). 『「氷点」停刊の舞台裏』日本僑報社.
- 蘆徳平(2002). 北京の大学生からみた日本『中国青年研究』2002年第2期, 52-55.
- 和喜他裕一(2006). 日中関係最構築への新たな視点——中国社会の変容と対中外交『立法と調査』261, 93-100.

(2012年10月31日受付)